

# 本山町地域おこし協力隊の取り組み

## 本山町の現況

本山町は高知県の北部に位置し、西に四国の水がめ早明浦ダムを望み、東西に吉野川が流れる、人口3,918人(2012年1月現在)の町である。面積は134.21㎏、うち森林面積が約90%にも及び、古くから林業・農業を中心に生活を営んできた中山間地域だ。多くの地域と同様、人口減少・少子高齢化が進み、多くの課題を抱えた典型的な過疎地域である。

しかし、ブランド米「土佐天空の郷」が食味コンテストで日本一に輝き、町南部の棚田地帯や吉野川の支流・汗見川などの美しい田舎の風景が評価され「日本で最も美しい村」連合に加盟するなど、様々な取り組みが成果を上げ始め、注目を浴びる状況にある。

## なぜ「地域おこし協力隊」に？

私が「地域おこし協力隊」に応募した動機は、「地域おこし」を仕事としたかったからである。そのためには多くの現場で多くの人と向き合い、経験と実践を積み重ね

ることが必要だと考えていた。当時大学院生だった私は、主に大阪の商店街や町会をフィールドに、地域おこしやまちづくり活動に参加していた。そこで出会った多くの方々を知るにつれ憧れを抱き、「この業界で仕事をするにはどうすればよいか？」を考えたようになった。答えが出ず、悩んでいた時期に知人を通じて本山町での「地域おこし協力隊」の募集を知った。初めは知らない土地、聞いたこともない職業に対して戸惑いもあったが、「多くの課題を抱える過疎地域の最前線で」と考え応募、無事採用となり、現在に至っている。

## 本山町地域おこし協力隊

「本山町地域おこし協力隊」は9名(2012年2月現在)が活動中である。林業に邁進する者は山師に弟子入りし、農業を志す者は簡易ハウスを建てて野菜の試験栽培を試みるなど、それぞれが興味のある分野を深く追求し、各々の持ち味を活かした取り組みを行っている。

そんなメンバーの中、私は主に、「マコモタケ栽培による耕作放棄地の活用」、赤身が

うまい幻の和牛「土佐あかうし」研究会、林地残材を収集し、薪にして活用する「たんころクラブ」と、農・畜・林、3つの事業に取り組んでいる。

## マコモタケ栽培による耕作放棄地の活用

「マコモタケ」とは、高級中華料理に使われるイネ科の野菜である。マコモタケの栽培は水稲と同じような方法であるが、収穫が機械化できず、人の手によって行わなければならないことが特徴として挙げられる。したがって、大規模な田んぼより、小さな田んぼの方が管理しやすく、栽培に向いている。一般に条件の悪い小さな土地から耕作放棄地になっていくため、そこでマコモタケを栽培して、耕作放棄地を少しでも減らせないかと考え、試験栽培及び販売を行っている。マコモタケの高い水質浄化作用や比較的栽培が容易なことも好条件である。

栽培を始めて2年目の現在、栽培技術や品質の向上と共に、販路開拓も大きな課題である。



本山町地域おこし協力隊  
中井 勇介

## 土佐あかうし研究会

「土佐あかうし」は、旨み成分の多い赤身肉とキレの良い脂を特徴とする、高知特産の和牛である。しかし、市場での評価を得にくく、生産農家の収益が低いことが最大の問題点である。

その問題に取り組むべく、私は生産農家と「土佐あかうし研究会」を立ち上げ、セミナー・研修への参加や、加工所の開設、加工商品の開発、イベントでの販売を行っている。



マコモタケ圃場の様子



本山の豊かな環境で育つ土佐あかうし

活動を重ねて多くのことを知るにつれ、方向性も定まってきたっており、現在は生産農家による直接加工・直接販売が目標である。

## たんころクラブ

「NPO法人土佐の森・救援隊」が実践している「副業型自伐林家」のノウハウを勉強した仲間と共に、山林に放置されてしまいう林地残材の活用を目指し、「たんころクラブ」を立ち上げた。発足して間もない現在は、山主の方から林地残材を収集して薪にし、独居高齢者世帯への配達を行っている。昔ながらの暮らしをしている方々にとって薪は欠かせないエネルギーであり、配達の際には有難いことに喜びの声をよく頂く。



薪割りに励む「たんころクラブ」の面々

## 「起業」と「定住」

私たち「本山町地域おこし協力隊」には明確な活動目標がある。それは「起業」と「定住」である。この3年間という活動期間のうちに起業し、定住の基盤を作ることが求められているのである。

上記3つの事業を行っているが、まだまだ思うような収益を上げるには至っていない。活動3年目を迎えるに当たって、それぞれの収益向上が大きな課題である。

## 特集

地域活性化への新しい風  
〜地域おこし協力隊〜